

災害支援や福祉において、「公共神学」が注目された。日本において公共神学の推進的役割を果たしている稻垣久和氏が、世界の公共神学の動向を伝える。特に昨年11月に刊行された国際雑誌「国際公共神学」(International Journal of Public Theology)以下「IJP-T」では、「対立における公共神学」というテーマのもと、論稿と「イスラエル／パレスチナに関する声明」が発表された。合わせて稻垣氏が解説する。(同誌の巻頭言、声明の翻訳は電子版に)

公共神学とは何か

日本でも「公共神学」という分野に関心をもつキリスト者たちが徐々に出てきている。世界のキリスト教は欧米中心から大きく離れており、信仰のあり方もつつある。信教の個人主義的なものへの反省から、コミュニティーとそこから埋め込まれた教会や信徒が文化と葛藤する中で、独自に神学すること(Doing theology)を重視する方向へのシフトが見られる。

公共神学は從来の神学とどこが違うのか。聖書とキリストを中心であることは全く同じだが、そのキリストが十字架上で死に、かつ復活したことを見つかりし信仰に受けさせた上で、世の人々の憂いと苦しみと共に担おうとする。同時にキリストは創造者なる神の第二位格であり、神の右に座す世界の主権者(コロサイ

イスラエル紛争で論稿・声明

1・16)であり、被造世界との間の和解者である(エバン・J・W・ヘンリクセン著「福音主義神学を広げて」日本キリスト教教育センター URL:jcec2.org)

文化や歴史そして諸学問、地球環境との対話を積極的にに行っていこうとする。

従来の神学が教会と世俗の「聖俗二元論」に陥りがちになるのに対し、「親密圈」と「公共圏」の区別をはっきりさせる。教会は「親密圏」に属していると自覚しつつも、市民社会の属する「公共圏」との対話を重視する。世との和解者。

キリストへの信頼がこれを可能にする。従来の神学の専門用語を「翻訳」して言葉と行きにおいて公共圏と葉と行いにおいて公共圏と叶ふ文化との対話

「福音」が武器化されたガザへの攻撃

従来のシオニストの移住者たちがパレスチナ人に対して仕掛けてきた戦闘行為の中で、その植民地主義を正当化するために聖書がさらに「武器化」していく道筋を追っている。イスラエル軍は「福音」(良き知らせ)と呼ばれるAIの軍事機械と戦闘組織を開拓してジエノサイドにまでエスカレートさせてしまった。

この論稿は次のようないいを投げかける。いったい日本のキリスト者がその文脈と視点から聖書の語りかけを聞き、その共通恩恵の広さ・深さと同時に、いま現れている「罪と惡」を神学するならば、日本宣教は必ずや新たな時代に入るのではないか。

対立の中における公共神学

を思い浮かべるのか。かつてこの地で説かれたイエスの王国(神の国)のものか、それともジェノサイドのものか。本論稿はこの概念が

はトランプ米大統領が、ガザ住民のアラブ諸国への強制移住ともとれる発言をしている。これは伝統的な強硬シオニスト派の主張をそのまま鵜呑(うの)みにしたものであり、国際舞台での各専門研究者や神学者も緊急声明を出して強く非難している。いま日本人キリスト者に必要なのは聖書の深い真理と「イエス・キリストの愛と平和の福音」の理解である。

聖書は時として、パレスチナの人々を抑圧していくことを利用されてきた。アルコリーの論稿は、ユダヤ教のシオニズムとそれを支援するキリスト教、それがパレスチナへの入植者のイデオロギーと化したときに激しく抑圧的になることを論証する。

公共神学はグローバルな文化に生きる人間の体験の中に、従来の欧米で確立してきた神学が見過ごしてきた「罪と惡」が新たな形で噴き出していることをぐり出す。ユダヤ人問題とシオニズムの複雑さは、これまでにも欧米神学者の視点から反省的に何度も語られていた。それがパレスチナ人キリスト者の文脈と視点から見られると、「イエスの福音」の広さ・深さと斬新さとその力に気づかされる。

公共神学の成果を踏まえつつ展開していく庄巻である。初期の頃は軍事力を誇ったローマ帝国的な力の「福音」であり、それが後にキリスト教の出現とともに反帝的な愛と平和の福音に変化したのである。今日、イエスの王国の福音の伝達を担っている教会は抑圧に面して預言者

他方で、公共神学の国際雑誌「IJP-T」には欧米以外からの寄稿が多い。文化と歴史が欧米と異なる所での教会形成は市民社会(公共圏)との対話を意図的に開発しないことには、教会それ自身の存続が危ぶまれるからだ。ただし、雑誌を散見しても、公共神学は地域ごとに強く文脈依存的であり、必ずしも体系性は見られない。それでも教会の存続をかけた「神学する」真剣さが見られる。

聖書は時として、パレスチナの人々を抑圧していくことを利用してきた。アルコリーの論稿は、ユダヤ教のシオニズムとそれを支援するキリスト教、それがパレスチナへの入植者のイデオロギーと化したときに激しく抑圧的になることを論証する。

公共神学はグローバルな文化に生きる人間の体験の中に、従来の欧米で確立してきた神学が見過ごしてきた「罪と惡」が新たな形で噴き出していることをぐり出す。ユダヤ人問題とシオニズムの複雑さは、これまでにも欧米神学者の視点から反省的に何度も語られていた。それがパレスチナ人キリスト者の文脈と視点から見られると、「イエスの福音」の広さ・深さと斬新さとその力に気づかされる。

公共神学は「日本の神学」や「〇〇の神学」といった属格の神学ではなく、従来の神学を核に持ちながらそれを拡大しようと/orする。文化化とのコミュニケーション(翻訳)を重視するとい

いが、ただ文化だけでではなく歴史や諸学問とも対話しつつ神学をより豊かなものにしてしまうとする。同時に「神学とは何か」という本質にも迫る。

他方で、公共神学の国際雑誌「IJP-T」には欧米以外からの寄稿が多い。文化化と歴史が欧米と異なる所での教会形成は市民社会(公共圏)との対話を意図的に開発しないことには、教会それ自身の存続が危ぶまれるからだ。ただし、雑誌を散見しても、公共神学は地域ごとに強く文脈依存的であり、必ずしも体系性は見られない。それでも教会の存続をかけた「神学する」真剣さが見られる。

聖書は時として、パレスチナの人々を抑圧していくことを利用してきた。アルコリーの論稿は、ユダヤ教のシオニズムとそれを支援するキリスト教、それがパレスチナへの入植者のイデオロギーと化したときに激しく抑圧的になることを論証する。

公共神学はグローバルな文化に生きる人間の体験の中に、従来の欧米で確立してきた神学が見過ごしてきた「罪と惡」が新たな形で噴き出していることをぐり出す。ユダヤ人問題とシオニズムの複雑さは、これまでにも欧米神学者の視点から見られると、「イエスの福音」の広さ・深さと斬新さとその力に気づかされる。